

# ガウディの「異形の美」

岩城久哲

## 序論

「ピレーネを越えればそこはヨーロッパではない」と言った人がいる。そしてそれを文化理解の一つの物差しとして利用する人は今もいる。しかしそれは一面的な見方でしかない。その視点の一つはロワールやセーヌを中心に据えてさまざまな文化を読み解こうとするものである。それはパクス・アメリカナの文化版である。そもそもロワールやセーヌに繁栄した歴史はさほど永いものではない。もう一つの視点はピレーネを越えたところに異文化との融合の場が展開しているということである。ここでは後者の視点で展望していく。

イベリア半島の北東部に位置するカタルニアはこの地域の中で特異な存在である。歴史的にも大陸と半島の文化がしのぎを梳ったところである。ここは永い低迷から脱出し 19 世紀末から文化的な輝きを持つ。カタルニアにおける二度目のルネサンスの到来である。ガウディ、ミロ、ダリ、カザルス、ロルカなどがその一端を演出する。スペインの文化は「異形の美」を創造すると言われるが、その中でもカタルニアは特異な存在である。ガウディの創造する美は傑出している。彼はかなり前に亡くなったが、その作品はいまだに見るものに新たな創造の意匠を教えてくれる。さらに彼の作品は 21 世紀も増殖をつづけている点に注目すべきであろう。21 世紀の初めでもその作品の完成は数百年後だとか未定だとかと言われていた。ところが 05 年頃から完成時期の予想が早まり、作者の死後百年には完成すると訂正された。そんな急激な建設時期の訂正にも興味が湧くが、なによりも彼が今も創造しつづける「異形の美」に惹きつけられる。

彼に関するさまざまな著作や映像などが世に出ている。そのなかには漠然と言われそれが一般に信じられているものもある。それらのことを彼の残した記述や彼を取り巻いた人々の残したものを中心に検証する。そのなかでもガウディのノートなどは傑出した存在である。これらのノートはスペイン市民戦争の徹底的な破壊やその後続くフランコ政権の弾圧から免れた貴

重な資料である。この資料にガウディ美の源泉が隠されている。

『レウス・ノート Cuaderno de Reus』もしくは『レウス覚書 Apuntes de Reus』として知られているガウディ直筆のノートは極めつきの資料である。<sup>1)</sup>

## 1 章. ガウディを育んだ世界

### 1 節 日常的に接した空間

彼はバルセロナの南西に位置するレウスに誕生するが、幼少のときから病弱で、小学校入学前に関節リウマチに悩まされる。そのため友達と一緒に屋外で遊ぶことができない。当時父は郊外のリュードムスに土地と作業場を所有している。やがてその仕事場が彼の生活の中心になるとともに、遊び場であり教育の場になる。

この病気は子供の形成に大きく影響した。このため長期間マスで過ごすようになり、そこでは痛みのため歩けず、何回も子ロバに乗って行ったことを憶えている<sup>2)</sup>。

マスとはカタルーニャ語で「家」を意味するが、特に作業小屋を指す。レウスの隣町リュードムスに畑を所有し、その畑に農作業用の二階建ての家があった<sup>3)</sup>。

その生活の中で父が作り出す驚異の世界に彼は日常的に接する。一枚の銅版が父の手で一個の鍋などに変化していく。今日でもリュードムスの人々の中にはガウディの父が作り出した鍋などを所持し自慢げに見せてくれる人もいる。こうしたマスでの生活のなかでガウディは空間感覚が養われ、困難といわれる空間を簡単にイメージし直感できるようになる。そのため成人してからのガウディは立体世界の想像の困難さをなんなくクリアしている。机上の数値としてではなく実践の空間世界を理解している。一般的に平面を容易に理解できるが、立体認識ではかなり苦戦すると言われる。「アニュラスの帯」「メビウスの帯」などや、正四面体を一筆書きで切り開いたときの展開図が隙間なく組み

合わされることが、その例としてあげられる。さらにそのさきに四次元世界がある。

自分は極めて容易に空間を見ることができ、幾何学の問題は問題ではない。また、初歩幾何学以外には一度として勉強したことがなく、それ以外のこの分野の本は一冊も見ることがない、とガウディは言う。

病弱な子供が同世代の子供と一緒に学校で学び自然で遊べない苦しみの中からじっと耐える能力を培い、以後の彼の人生を支える。

忍耐は能力である。それ故、忍耐できない子供は不能者である<sup>4)</sup>。

## 2節 リュードムスの自然

病弱なガウディを育んだものの一つにカタルニアのリュードムスの自然がある。父親の作業所の周りに展開する自然である。小屋の傍らにある花々、小屋で飼っている鶏やその鳴き声、畑に植えられているオリーブ林、そこに集まる鳥やそのさえずり、小さな虫の音色、遠くに点在している松林、その背後に連なっているカタルニアの山並みが彼を育くむ。

遠景にはブレードス山を見ながら、大自然の純粹で快い思い出を作った。この自然を「私の師」と呼んだ<sup>5)</sup>。

彼は自然から心地よい感情を貰うだけではなく、自然を実によく観察する。樹木の形体と構造、小動物の形状と色彩、風の流れやそのにおいなどを分析しつづける。

新しい形態を厳密に分析するならば、過去のものとして過去を凌ぐその他多くの要素とが含まれていることが判明する。さらに書籍は文化の道具であり、それまでになされたことを基礎としている。したがって、自然を直接研究する方がより良い<sup>6)</sup>。

後にこのような観察によって培われた眼が彼の建築の基本を創り上げる。

数百年来の建築的束縛が、今日のほとんどの建築家たちをして、人間味ある建物を建設すべきところ、巨大な重石だけを作らせてきた。すべての建築は、その土地に育つ樹木のように、土地の産物であり、その土地と一体化しなければならない<sup>7)</sup>。

彼は地中海沿岸で生活する人間特有の思いから太陽を賛歌している。南中時に太陽が降り注ぐ光の明るさ、暖かさ、角度などの絶妙さを楽しんでいる。この土地しかこの大きな恵みを享受できない。

太陽は生の刺激剤である。……われわれは陽に当

たることを習慣にしているから、太陽は冬と同じく夏もまた強い刺激剤になる<sup>8)</sup>。

太陽の存在しない、貧弱な太陽光線が創り出す北方ヨーロッパ世界を悲しみを込めて彼は眺めている。ピュヴィス・ド・シャヴァンヌが描いた『貧しき漁夫』を見て言う。

これ以上の悲しさはない。太陽も、明るい水も魚も、また生気もなく、色気のない灰色で描かれている<sup>9)</sup>。

脆弱な太陽光しか降り注がない土地に住む人間に、深く憐憫の情をいだくだけでなく、彼らが創り出す文化にも同情し、何かが不足していると言う。彼はシュバルツカッツの向こうに生活する思想家たちがつくりだす思想の不十分さを太陽の不明瞭さにあると指摘する。一方、地中海に拠点を置く哲学者たちの繰り出す思想の明晰さを絶賛している。

デカルトの基本名言は北に移動するとその明晰さを失う。三段論法『われ疑うゆえに、われあり』は、考え得る最高の非論理性を有す。考え得る論理性では、『われ疑うゆえに、われ無知なり』である。地中海の哲学者たちは私だけを語る。というのは、それだけで既に存在を示しているからである。この暗闇は（ロシア近くのケーニヒスベルグ [現ロシア領カリニングラード] 出身の) カントの到来で最高に達し、これは虚無主義者たちやボルシェビキと同じ暗闇である<sup>10)</sup>。

## 聖地モンセラ

バルセロナの北西部に位置するモンセラはカタルニア人にとって聖地である。さまざまな異民族の侵略から難攻不落の砦であるだけでなく、カタルニア人にとって精神的なシンボルである。ガウディもこの聖地をたびたび訪れる。彼の興味は聖地そのものより、そこにある自然、とくにそこに存在する岩山の景観である。その景観は奇岩が峨峨として聳えている。その自然はリュードムスとは別のインスピレーションを彼に与える。一見すると崩落しそうな岩山、延々と続く曲線の連鎖などは、魅力あふれるものである。そこに大いなる神の存在を見る。

発明されたものが（神による）自然の法則に合致しない場合は、成功しない<sup>11)</sup>。

さらに岩山以外のモンセラの自然にも感銘を受け、後の多層の音を奏でる教会建築の中にそれを取り込もうとする。

『栄光の第一秘蹟』は祭壇として配された枢と前

面（のすでに建設された道の拡幅部）に果樹園を持つ予定であった。主昇天の祭日には、この時期のモンセラートに生息するサヨナキドリのさえずりの伴奏と花咲く果樹園の香りを伴う早朝のミサがもたれるであろう<sup>12)</sup>。

### 3節 熱きカタルーニャ

生涯ほとんどカタルニアを離れることのないガウディは、カタルニアこそスペインそのものであり、その中心だと言う。

スペインはわれわれ（近イスパニア、もしくはタラコネンセ）であるからだ。……スペインという名はわれわれに由来する。……スペインという名称も、国旗も、貨幣もわれわれのものである<sup>13)</sup>。

ガウディはカステージャ中央政府とカタルニアの関係を国民的英雄であるドン・キホーテを引き合いにだし明快に述べる。

セルバンテスは地中海からの帰路についた『ドン・キホーテ』を描いている。母国の英雄と母国に対する作者の皮肉には血の滲むような思いが込められている。それとは反対にバルセロナやカタルーニャ語への賞賛、さらにカタルーニャの盗賊までも含めた賞賛は見事なものである。ドン・キホーテが地中海の海岸に達するまで正気を取り戻さなかったことは注目し、また正気を回復すると直ぐに死んだこと、すなわち正気が彼を生きさせなかったことも注目し<sup>14)</sup>。

なんと明快なカタルニア賛歌でなからうか。さらにカステージャの王宮に仕え権勢を揮ったゴヤをも皮肉る。

ゴヤの絵のように、テーマを言わないとか、何の批評もしないなんてことはしないで欲しい<sup>15)</sup>。

ドン・キホーテのように正気でないカステージャにたびたび虐げられる歴史をもつカタルニア人は頑強に抵抗する。カタルニアの弾圧される状況を詩人のジュゼップ・フォッシュは詠む。

地下にある駅の入口で手と足を鬚の税関吏に縛られたぼくの眼に、マルタが国境行きの列車で行ってしまう姿が見えた。彼女に微笑みかけようとしたが、多頭の民兵の手下に連行されてしまい、森には火が放たれた。……おまえは歓喜の彼方へ魔法の岸辺へと立ち去る 棘だらけの洞窟の泥酔した巨人たちとともに 十字の岩の剥製の鷹たちとともに 忍び足の夜行性動物たちの神々が跋扈する海へと……<sup>16)</sup>

ガウディは歴史に遡って芸術が生まれる環境に言及

している。それは豊かな経済に裏打ちされることこそ必要だと言う。その意味で地中海交易により繁栄しているカタルニアも優れた芸術を生み出す可能性がある。

商業は常に芸術の保護者であった。類稀なる芸術趣向を誇るギリシアは商業に秀でた民族であった。あらゆる大洋を航海した船乗りたちの故郷であり、かつては当時知られていたあらゆる世界の商取引を集中したヴェネツィアとジェノヴァの古共和国を持つイタリアは、大芸術家たちの揺籃の地であり、全世界から賞賛される誠に美しいモニュメントを持っている<sup>17)</sup>。

かつて輝いていたバルセロナが再び歴史の脚光を浴びるには、経済のみならず芸術の助けが必要である。その芸術を育むには着実に力をつけてきた中産階級の援助が必要であると言う。

芸術と商業が常に共生してきた良好な関係例をバルセロナに見ることができる。バルセロナでは18世紀に「商業会議所」に所属する商人たちが「リョッジャ（商品取引所）」の建物内に美術学校を設立した<sup>18)</sup>。

カタルニア社会が置かれている状況をカタルニア人の性格に触れながら挿絵によって表現したのがセスクである。ガウディはそのセスクを深い洞察をもったものとして賞賛する。

彼は現実の頑固な記録者、半ば詩人で半ば予言者である記録者となった。今日われわれを驚かすものの多くは、彼がずっと以前からその出現を見通していたものだった<sup>19)</sup>。

#### バルセロナ建築学校

裕福ではなかったガウディはバルセロナ建築学校で勉強するには、さまざまなアルバイトをする必要がある。そのためときには授業を休む。

この窮状からの脱出に、多くの仕事をしなければならぬ。……フォント氏の授業には欠席できないため、病気だと言って欠席する<sup>20)</sup>。

しかしそこまで通った学校での教育に必ずしも満足しない。少年時代から学校教育よりも、実際の生活のなかで学習してきた彼にとって、大学教育にもときには不満が湧く。まさに机上の人ではなく実践の人である。

過度の分析という欠陥が学校をして学生たちの目を台無しにしている。なぜなら、学校で教えられたことは全く役に立たないからだ<sup>21)</sup>。

実践の中に芸術の奥儀が潜んでいる。その奥儀を解き明かすのが自分である。だから自分こそが芸術の師

であると言う。

芸術に師はない、唯一の師は自分自身である。あるのは芸術を学ぶ方法である<sup>22)</sup>。

その手助けとして、ガウディは過去のさまざまな建築を研究する。

ガウディの学生時代、建築学校の図書館はギリシア、ローマ、ビザンティン、エジプト、中近東、インドなどの建築写真集を購入していた。本人によると独り居残り感嘆しながらそれらを何時間も閲覧したという<sup>23)</sup>。

#### 4節 ムデハル様式

そのような文献の研究の中で構造的にムデハル様式にとくに感銘を受ける。

ムデハル・モリスコ：郊外に建設されたこのグループの作品構成は、下層における水平帯の配置、上層における上部を尖り頭布の形に閉じたアーチで終わるリズムカルな縦帯装飾、およびレンガ造の積層毎に持ち出される持送りで特徴付けられる。ガウディはアラブ人たちの力学感の方が優れているとして、「アラブ人たちの徐々に持出す持送りは、中世キリスト教徒のいかなるアーチよりも示力索（フニクラ）の線に近似する」と言う<sup>24)</sup>。

#### アランプラ宮殿

グラナダのアランプラ宮殿はヨーロッパに残っているムデハル様式の最高傑作である。船のような形状をした小高い丘の上に数百年の歳月をかけてゆっくりと建設された建築の集合体である。それは単なる建築の集まりを超えた存在である。彼にとって魅力あふれる芸術の殿堂である。コマレスの塔の天井装飾は、レバノン杉を精巧に組み合わせられたものだが、それを見てガウディは言う。夢を提供してくれる建物である。

〔アルハンブラは〕竹と塗装された石膏で作られた檻、もしくは人形の家である<sup>25)</sup>。

アランプラ宮殿からガウディが感銘をうけたものの一つにその合理的な設計がある。たとえばレオネス宮の中央にあるレオネスの庭を取り囲んでいる細い列柱もそのひとつである。ゴシック建築の飛び梁に見られる必要以上の補強材や柱の太さをそれは排除している。グエル公園のギリシア劇場を支えている列柱のコーティングにも見られる。手前と奥の柱のコーティングの高さが異なる。これは限られた空間に広大な遠近法を演出する。

アルハンブラ宮殿の写真を検討すると、円柱は細

いため、柱身にモールディングを施すことにより柱頭部を長く見せ、柱身を短くしていることが観察される<sup>26)</sup>。

#### 5節 神との出会い

スペイン全体から見ると、カタルーニャ人の教会への信頼は低いと言える。教会への信頼が低いからといって神への信仰、キリスト教への帰依、聖書への信頼が低いということにはならない。これはカステージャ、中央政府とカタルーニャとの関係に起因する。つねに教会は豊かで広大な土地を所有し、豊かなもの、支配者に優しく、彼らの弁護者であると考えられる。神の世界を説きながら、教会の組織の防衛のために、世俗の体制と繋がり、ときにその手先となることもある。経済的な豊かさを創造するカタルーニャは中央政府から相応の評価を受けず、その富を還元されることはない。単に搾取され、むしろ支援されることはない。これが結果としてのカタルーニャ社会システムの整備に繋がらず、経済的にも前近代性を残す。それを影で演出している教会へのカタルーニャ人の信頼が低い結果に結びつく。

#### 断食

ガウディは「サグラダ・ファミリア」の主任建築家に指名されたときから、しだいに変わっていく。教会から遠い存在にあった若き日の彼は世俗の名誉を重視し、旨いものを食べ、美味しいワインを飲み、ファッションブルな服装を身につけるなどをして日々を過ごしている。このような時期に、ガウディは聖堂建設に携わることになる。最初は今までの生活の延長線上で彼は製作している。そんな彼もオーナーである神と真剣に対峙をする時が訪れる。荒野で40日間の断食をした神の子に倣う。

断食は健康的であり、体を調整し、その人の多くの誤解や誤りを正すし、また、人は消化に、すなわち下水道を満たすことにエネルギーを浪費すべきでなく、消費する食料を最小限にすべきことを明らかにする<sup>27)</sup>。

神の子の「愛の教え」から自己犠牲の精神を体得する。聖堂のためになり得ることなら何でも自己犠牲の精神でなさなければならない。……背後に自己犠牲のない慈愛は本当の慈愛でないし、多くの場合は単なる自惚れにすぎないからだ<sup>28)</sup>。

以後資産家の依頼に応えることを減らし、「神の館」の建設に精力を向けていく。それとともにかつて興味

をもっていた世俗の要求をなくしていく。着るもの食べるもの住むところにも頓着しなくなる。オーナーの館の建設とオーナーの教えが説かれている教会への祈りだけに集約する。

有意義なものは報酬のためにはなされない。なぜなら、自己犠牲なくして有意義なものはなく、自己犠牲とは報いを想定せず、「己自身」の身を削ることである<sup>29)</sup>。

資金不足になると関係するものとともに街頭にでて募金活動するガウディの姿は幸福そのものである。彼の眼の先に神を結び目とする完成された社会がある。

各人は神から与えられた才能を使わなければならない。この才能を実現することが最高に完成された社会である<sup>30)</sup>。

サグラダ・ファミリア建設はガウディの生活と一体化する。神のしもべとなる。

ガウディとサグラダ・ファミリア聖堂とが精神的にも経済的にも表裏一体の関係にあった経緯を考えると、この聖堂事務所がガウディ私用のアトリエのように考えられて当然であった<sup>31)</sup>。

## 2 章 ガウディの美の世界

ガウディは全生涯のほとんどをカタルーニャで創作活動をする。さほど広くないこの地域が彼にとって宇宙の中心である。ガウディにとってカタルーニャは特別な雰囲気をもっている。カタルーニャで活躍し「異形の美」を創造する多くの芸術家たちにとって、ここはいつの時代も永遠の故郷である。ルネサンスを演出したダビンチやミケランジェロたちにとってのフィレンチェとの関係に似ている。カタルーニャ人にとって、カタルーニャは魅力あふれる空間である。ガウディはその理由として「優れた知覚」をあげる。

われわれ地中海人は造形性と視覚によって認識されるすべてに対してもっとも完全な知覚を持つ<sup>32)</sup>。

ガウディは当時パリを中心に進行していた新しい芸術運動にも違和感を覚えている。それらの芸術運動が推し進める芸術作品は、芸術の非人間化に繋がりガウディにとっては到底受け入れることができない。抽象芸術運動が当初目指していたその非造形性は容認できないものであり、キュビズムなどは人間性から乖離し常軌を逸している。そこに神のしもべとしてのガウディの強い個性を見ることができる。

芸術は、人が人のために作るものであるから、理

性的でなければならない<sup>33)</sup>。

彼の根底には自然や人間に対する熱い思いがあり、過去のさまざまな作品を時代、文化、地域を越えて融合しようとする。

サグラダ・ファミリア [聖堂] の解決には諸様式の統合がある<sup>34)</sup>。

彼は単なる過去の文化の融合にとどまることなく新しいものを生み出そうとする。その中で繰り返しゴシックの不完全燃焼を指摘する。

ゴシック芸術は不完全であり、最終の解決に達する前に中断した。コンパスと形式の様式であり、機械的な繰り返しの様式である。構造の安定は控え壁という半永久的なつかい棒に頼り、それは不具者が松葉杖に寄り掛かっているようなものだ。完全な統一が得られておらず、構造は外装の幾何学化された装飾と融合していない。この装飾は完全な付け足しであり、それを省略しても、作品の安全性は崩れない<sup>35)</sup>。

### 1 節 曲線が創造する美

彼の作品の殆どにおいて、曲線が一つの特徴である。曲線が創り出す空間はある人々にとって、不安を催すかもしれないが実際は違うという。ランブラス通り南側にあるカサ・パトリヨに賃貸し住んでいる住民は、「この曲線が創り出す空間は落ち着きを与える」と言い、20 数年も住んでいる。そのような落ち着きを与える理由としてガウディはこんなふう述べている。

直線が無限の表現であるのに対し、(閉平面) 曲線は限定を意味する<sup>36)</sup>。

無限の連鎖に対する不安、有限な限定に対する落ち着きとして曲線を捉えている。学校でのほとんどの授業において目立たなかったガウディだが、空間認識においては優秀な成績を修める。幾何学がとくに際立っている。以後彼の建築様式は幾何学を基本にして推し進める。

幾何学の第四の道標はこれらの曲線の研究であった。しかしそれは、円錐曲線のようなものではなく、ねじれ面(おそらくモンジュ)の研究である。この曲面はサグラダ・ファミリア聖堂で造形的により一層の前進がはかられてきた<sup>37)</sup>。

そのような曲線が創り出す空間は動物の体内や胎内を想像させる有機的な空間を演出する。そのような空間はカタルーニャで目撃される動物であったり、伝説的な動物ドラゴンやアンモナイトなどであったりする。ときにそのような造形物に「サン・ジョルディ」

という聖人の名を冠し神の世界とのつながりを示す。さらに新しい建築素材として取り入れはじめた鋳鉄などを曲線的に加工し、門扉に樹木の花で飾る。石造建築にはない軽快さと明るさを演出している。カサ・ミラなどの屋上の排気口などはモンセラなどの岩山から生み出された曲線である。曲線を繰り返すことによって生命の連続性を表現する。ガウディ建築天井の特徴として「ヴォルトアーチ」が挙げられるが、この曲線は古代ローマの造船技術などにヒントをえている。

実際には曲げ応力は常にある。しかし人間は複雑なものを解決できないから、クーポラ（ドーム）やヴォールトでは圧縮力だけを扱う<sup>38)</sup>。

## 2節 幾何学模様が演出する美

ガウディはムデハルが奏でる装飾にも感銘を受ける。偶像崇拜の完全なる禁止を具現化したその装飾は彼を瞠目させる。コーランの字句が図案化され、それが限りなく連続していく装飾は、具体的な図柄とは異なった華やかな印象をあたえる。それは彼に新しいデザインへと導き、放物線への新たな興味を湧かす。彼は三角定規とコンパスによる作図を重要視するようになる。

比例中項は直角三角形（三角定規）、円（三角定規で作図）、あるいは放物線（三角定規で作図）で求めることができる<sup>39)</sup>。

彼は幾何学がつくりだす美の世界に魅了されつづける。

立体・面・線の形やそれらのコンビネーションにおいては、幾何学もモチーフになり得るだろうし、それら幾何学形の対比は美の主要素の一つであるプロポーションにも貢献しよう<sup>40)</sup>。

そして現実の人ガウディは代数に対する幾何学の優位性を主張する。代数は抽象性を表すに適しているが、幾何学は具体性に富んでいる。

面を形成するための幾何学は建設を複雑にせず、単純化する。複雑になるのは幾何学形態を代数で表現するからだ<sup>41)</sup>。

## 3節 非対称の美

ムデハル様式の図案は文字の図案化だから左右対称ではないが、一見すると左右対称のように見える。彼はこの不完全なるものの完全化を建築物のファサードで活用している。ファサードに次のように記している。

降誕—伝道—受難（受肉—磔刑—昇天）

力—知—愛（無限） 父—子—聖霊<sup>42)</sup>

その非対称化は建物全体の立体の中でも目撃できる。

降誕の門は明らかに柔らかい形態でできているのに対し、受難のそれはかなり硬い造形という意味で聖堂頭部とは異なる。聖堂頭部は2つのファサードの中間的な造形表現になる<sup>43)</sup>。

## 4節 転び柱

古代ローマが残した水道橋の上部の組み立ては全く接着剤が使われていないが、十数世紀にも亘って維持されているという事実は驚きである。ガウディはこれらから転び柱を創造する。樹木にしても自然界には完全なる垂直は存在しない。コロニアル・グエル教会などにも使われている転び柱は彼の真骨頂である。

（何度となく垂直にしようとしてきたにもかかわらず）この世界には1本たりとも垂直な柱はない。ものの本性は傾こうとすることであり、唯一必要なことはどこまで傾斜させればよいかを研究することである<sup>44)</sup>。

## 5節 斬新な装飾

ガウディの建物内外に施されている装飾は欧米の伝統を必ずしも踏襲していない。アランプラの「双姉妹の間」の腰壁などに施されている手法を駆使し、さらに発展させる。色タイルを破碎しそれを壁面の凹凸に使い、色ガラスなどを使いながら光の効果を高めている。光は彼にとって一つのキーワードであり、建物の上下階の窓のサイズを変えることによって光が均衡に注がれるようにする。それを可能にしたのは当時頻繁に使われた鉄とガラスのせいである。光の文化こそがカタルーニャ人の真髓である。

鋼鉄の出現で巨大なガラスのモニュメントを作るという私の夢は実現可能になった。……天体のような球体の中でいっぱいになり、太陽は四方八方からそそがれる。……私の宮殿は光よりも明るく輝くだろう<sup>45)</sup>。

天井に夜空のような木組格子を使ってヒラーの洞窟に似せて光を意識させる。

# 3章 ガウディの美がある世界

## 1節 カタルニア

ガウディの作品群はカタルニア、とくにその生涯のほとんどを過ごしたバルセロナにある。とくに旧市街地のランブラス通りを中心に市域全域にある。巨匠の作品数としてはそれほど多くはないとも言えるが、そ

のデザイン性でそれぞれの地域に強烈な光を放ち、豊かな表現性で人々を惹きつけている。海洋国家として生きてきたカタルニアは伝統的に豊かな独創性を保持している。カタルニアは古代ローマ時代においてタラゴネンシスと言われ、5賢帝時代には2人の皇帝を輩出している。伝統的にカタルニアは豊かな独創性を育む風土をもっていると言える。

何人かの外国人はバルセロナが大変豊かだと思っている。……われわれの創意によるのであり、われわれはこの工夫で不足を補い、彼らの豊かさを超えることができる<sup>46)</sup>。

#### ゲエル公園

バルセロナの北部にある丘にゲエル公園がある。ガウディはここに自然と共生する住宅地を建設しようとする。彼のテーマの一つは自然との共生である。ガウディが活躍した時代はこの丘には殆んど何もなく、住む人のいない高台である。当時は市街電車もバス網も整備されていない。旧市街地とゲエル公園との間には今日拡張地区が広がっていることを考えると隔世の感がある。当時の人々はここを住宅地にしようというガウディの考えが理解できず、ここに住もうとするものはいない。結果として彼の計画は失敗に終わる。彼の考えが時代を先行していた。住宅地としては失敗に終わるが、その後公園として人々に共生の場として憩いの場を提供する。20世紀スペインの「異形の美」を代表し、「絵画の詩人」と言われるミロも子供時代ここでよく遊んだと言う。ガウディはその丘にある素材で建設するが、これは今日の自然や地元との共生、環境問題の先取と言える。

目的は建設地から出る材料だけを使い、公園内の様々な地点を結ぶ連絡網を整備し、さらに使いやすくすることであった<sup>47)</sup>。

#### コロニア・ゲエル教会

やがてサグラダ・ファミリア聖堂に活かされていくが、地下聖堂しか完成していない未完のコロニア・ゲエル教会堂に関して彼は言う。地中海建築の原点の一つである東ローマ様式を研究したと。この教会堂は祭壇の後ろに聖歌隊の場所が設けられ、その歌声や楽器の音が反響するように設計されている。メリダにある古代ローマの屋外円形劇場の反響効果を応用している。

われわれはビザンティン様式が後世に伝えた建築を出発点とした<sup>48)</sup>。

バルセロナ港近くのランブラス通り南側あるゲエル

邸は彼の初期の傑作作品だが、建築家ガウディの名を高めた作品と言える。コロニア・ゲエル教会でさらに信頼を得たガウディの才能を開花させるのが繊維業で財をなしたゲエルである。ゲエルなくしてガウディの才能は開花しない。

あなた（ゲエル）は私（ガウディ）に住宅用の敷地を用意し、私はあなたに邸館を建てた<sup>49)</sup>。

#### カサ・ビセンス

カサ・ビセンスの建設において、ガウディはゴシック様式の不必要な工法を批判しつつ、実践理論に基づき建築を試みる。彼にとって、とくにゴシック様式の「飛び梁」構造は美的に受け入れがたい。そのなかでセゴビアの「水道橋」の構造は瞠目に値する。単に石が積み重ねられているように見える構造もその驚くばかりの精密さを研究する。その研究から生まれたカサ・ビセンスの安全性に不安を感じる人々にガウディ自身がその梁にぶら下がり安全性を証明する。

カサ・ビセンスでは、ガウディは建物角の隅切部に順次飛び出すレンガ造持送りで支えられた塔を設けた。その塔が上に建ち上がったとき、ある田舎ものがガウディに倒壊すると警告した。建築家は落ち着くよう言ったが、恐れおののいていたその男は、仕事を終えると、すぐにでも起こると信じていた災害の瞬間を待ち続けた。それを知ったガウディは彼を呼び、こう言った。「君は内部側に作られているレンガ造部を考えることなく、外側に持出された部分しか見ていない」と<sup>50)</sup>。

#### カサ・ミラ

カサ・ミラは当時の議員の注文で造られた住宅であるが、そこに施されたさまざまな奇抜なデザインで知られている。とくに馬車時代に別れを告げ自動車革命が進行しつつあった時代に、それを取り組んだ建物として名を残している。スペイン特有のパティオを残しつつそれを取り入れている。

最初の構想は各階へ自動車でのアクセスができるよう大パティオ周囲に二重の斜路を設けることであった<sup>51)</sup>。

#### 2節 その他の地域

##### レオン

カタルーニャ人であることにこだわったガウディはカタルーニャ以外でその芸術活動をそれほどしていない。その数少ない作品の中でもアストルガの司教館は

特筆すべきである。依頼をしたのがガウディと同郷の司教である。そこにカタルーニャ人の強い同郷意識を垣間見ることができる。

アストルガ司教館は……われわれと同郷の、自分と同じレウス出身のグラウ博士のお蔭である。あの町に着任した博士は司教館建設に大変な努力をした<sup>52)</sup>。

しかしこの司教が亡くなると教会関係者にガウディの斬新さは不興をかい、その建築設計の変更と当初の予定されていた利用目的も変えられる。

## 4章 サグラダ・ファミリアの秘密

絵画全盛時代にあって、ガウディは建築が全ての芸術の頂点にあり、建築家がすべての芸術の頂点に君臨していると考えられる。これはミケランジェロがダビンチを意識して、絵画に対する彫刻の優位を主張したのと類似している。

建築家は言葉のもつ最高の意味で統治者である。なぜなら、前もって作られた憲法はなく、建築家がそれを作るからだ<sup>53)</sup>。

しかも建築家は素材を美的に科学的に組み立てるだけの人間ではなく、使われる素材の特質を知り、素材の本来の存在意義を知る必要がある。さらにそこに住む人間を理解する必要があると考える。

建築作品とは、石に実現しようとする理念の論理的な表現にほかならない。それぞれは本質的な理由によって在るべき場所に配され、美しい形態そのものは、それを存在させる理念の具体化以外のなにものでもない<sup>54)</sup>。

建築家はたんなる組み立て屋でもなく、作成者でもなく、神の意思を見いだす人間であるべきだと説く。当初建築家は自分の意図が大衆に理解されないこともある。ガウディは数々の斬新な作品を依頼主の注文に基づき建設し、さまざまな反対や妨害を受けながらも、超然と制作に邁進する。

この門（受難の正門）が余りにも常軌を逸脱していると思う人がいるかも知れない。しかし、私は恐怖心を感じさせたかった<sup>55)</sup>。

やがて依頼主はそのあまりの奇抜さについていくことができず辞職する。理解できない大衆も、街の景観にそぐわないとか劣悪であるなどの理由で反対する。当時バルセロナでゼネストが頻発し、依頼主は大衆の攻撃の対象になることを避けるために、設計の変更を

迫るが孤高の芸術家ガウディはそれを拒否する。彼は人々に奇抜さを通して神の世界を示そうとする。

### 1節 音にみだされる殿堂

カタルーニャ人はとても音楽好きな人々である。週末になると広場で彼らの音楽を歌い踊る。踊りではサルダーナが代表的なものである。音楽ではカザルスの「鳥の歌」もそのひとつであるが、「マタマラ」などは彼らの身近な肌に染みついている音楽である。ガウディもそのような音楽に日常的に接しながら、教会から朝晩流れてくる鐘楼の音に魅せられる。

国民は国歌をよく歌い、革命歌をよく歌う。賛美歌を歌わなければ、不敬でみだらな歌を歌う。したがって、国民は教会堂で歌い、賛美歌に参加すべきであろう<sup>56)</sup>。

### 2節 光あふれる円柱の森

サグラダ・ファミリアの主任建築家になったとき彼は必ずしも熱心なキリスト教徒でない。数多くの人間と同じように名誉や地位も望み、流行のファッションに身を包み美食を堪能し恋愛もする。しかし50歳近くになり、ガウディは神の世界に目覚めその世界をより知ろうとする。そのためあらためて聖書、賛美歌、教会行事暦などを調べ、神の世界に近づくには視聴覚によってなされるべきだと。

新約聖書および聖パウロもまた、聴覚は信仰の感覚であると述べる。〔これに対し〕視覚は栄光の感覚である。なぜなら栄光は造形であるからだ。その根拠は、ある賞賛したいとき、モニュメントとか、彫像とか、浮彫りとか、あるいは肖像画を作り、その人に捧げることに見られる<sup>57)</sup>。

神を光と理解したガウディは光を巧妙に描いた画家フォルトゥニーを絶賛する。

しかし、われわれのフォルトゥニーは光を微塵に変え輝くような豊かさを与える。思うに、今日まで一人の画家として彼を越えることができない<sup>58)</sup>。

### 3節 オーナーが出迎える空間

神を讃える建築物のオーナーは神である。そのオーナーを讃えるために人々は「栄光の門」から日中入ってくるべきである。明るい太陽の下、入ってくる人々をオーナーである神が出迎え、神の世界に誘う。

あなたは私をも消し去ることができるのです。ミサで言うように、「あなただけが崇高なのです」



をご存じないのですか。完全は一つしかなく、しかも、この世にはないのです<sup>59)</sup>。

## 結論

彼は幾度か恋愛をすることはあったが、結局生涯結婚をすることはなかった。肉親の情愛に恵まれない人生を歩いた芸術家である。最大の理解者であるグエルが彼のもとを去ったときはかなりのショックを与える。その後さまざまな依頼を断り、「神の館」だけに打ち込んでいく。それゆえに彼に対して「神の建築家」という伝説が生まれる。

彼は……サグラダ・ファミリアの仕事しか持っていない。肉親も財産もクライアントも、何も持っていない。だからこそ、サグラダ・ファミリアに全身全霊を打ち込むことができる<sup>60)</sup>。

さまざまな作品を研究し制作したガウディがたどり着いた境地は、作品は自分ひとりの成果ではない。サグラダ・ファミリアの建設をリレーのように後世に伝えていく。そのために彼は「神の館」建設に単なる一つの道具となる。「神の館」は時代から時代へ引き継がれるものである。過去にも建築建設にはリレー方式がある。ドイツ統一の象徴であったケルン大聖堂や未完成のヴェズレーのサンタ・マリア・バジリカ教会などもそうである。

この聖堂の建設が長期になることを理解しなければならぬと付け加える。それは壮大さで際立つすべての聖堂に言えることで、建設は数世紀にわたっている。……現在でも完成していないのだ<sup>61)</sup>。

人々がサグラダ・ファミリアの完成に立ち会うことができなくて残念ですねと言うと、彼は言う。

このような作品は長い時代をかけて生まれるべきで、長ければ長いほど良い。モニュメントの精神は常に守るべきだが、作品の生は世代から世代へと受け継がれ、これにより生き、形になっていかなければならぬ<sup>62)</sup>。

建築は単なる人間の創造物ではなく、自然ともに成長すべである。それを神が見守っている。せっかちになるのは人間であって、神は永遠であるから完成を急ぐ必要はない。

サグラダ・ファミリア聖堂の建設はゆっくりとしている。なぜなら、この作品のご主人（神）はお急ぎではないからだ<sup>63)</sup>。

そしてガウディは「神の館」の完成を自分の後継者

に託すことになる。

ドゥメネク・スグラニーエス Domenec Sugranyes i Gras (1878 - 1938) はガウディを後継した聖堂3代目の建築家であり、両者ともレウス出身であった<sup>64)</sup>。

建築現場に寝泊りをする彼も、晩年は建築中の鐘楼に上ることができなくなるが、サグラダ・ファミリアの仕事が終わり帰宅につく建築家たちをいつも飄々と見送った。その後教区教会フィリップ・ネリの祈りに出かけ、それを一日も欠かすことはなく、祭壇を前にしていつも懺悔している。

すでに夜であった。われわれ全員と親しく、そして丁寧に別れる。全員と握手をし、「お元気に、お元気に、お元気に……」と繰り返した。それを幾度も幾度も繰り返した。あの大きな聖堂のある広場を通り抜け、悟りを得た言葉と使徒のような単純さでわれわれに語った偉人の手のぬくもりを私が感じている間も、彼は同じ言葉を繰り返した<sup>65)</sup>。

そしてガウディはフィリップ・ネリへの途中の横断歩道において市街電車で撥ねられる。入院したところは彼のライバルであるイ・モンタネールの傑作のひとつであるサン・パウ病院であったことも不思議なめぐり合わせであるが、数日後に死亡する。

アントニオ・ガウディ・コルネート氏、74歳、タラゴナ県レウス出身、フランシスコとロサの子息、住所サグラダ・ファミリア聖堂、職業建築家、独身は、専門医の証明書と診察によると外傷による内出血が原因で、今年10月16日16時オスピタル通り56番にて死亡し、亡骸はサグラダ・ファミリア贖罪聖堂墓地に埋葬が予定されている<sup>66)</sup>。

ガウディは「神の館」建設完成という「約束の地」に入ることはできなかった。それは彼にとってはすでに想定済みのことである。彼の人生と作品の創造を考えるとそこに「申命記」との類似性を見出すことができる。「約束の地」に入ったものとして描かれている「申命記」の現代版が、「サグラダ・ファミリア建設」である。「神の館」の完成に関わったものとして現在も建設が進行している。ヨシュアが「約束の地」の完成に向かったように、スグラニーエスが「神の館」の完成に力を尽くしている。

## 註

- 1) 『建築家ガウディ全語録』 鳥居徳敏 中央公論美術 平成19年 p.57
- 2) 同上 p.541

- 3) 同上 p.541
- 4) 同上 p.373
- 5) 同上 p.541
- 6) 同上 p.378
- 7) 同上 p.512
- 8) 同上 p.378
- 9) 同上 p.583
- 10) 同上 p.543
- 11) 同上 p.363
- 12) 同上 p.352
- 13) 同上 p.370
- 14) 同上 p.352
- 15) 同上 p.14
- 16) 『カタルーニャ現代詩 15 人集』 訳編澤田直 思潮社 1991 p.90
- 17) 『建築家ガウディ全語録』 p.413
- 18) 同上 p.414
- 19) 『発禁カタルーニャ現代史』 モンセラール・ローチ & セスク 現代企画室 1990
- 20) 『建築家ガウディ全語録』 p.61
- 21) 同上 p.373
- 22) 同上 p.380
- 23) 同上 p.83
- 24) 同上 p.56
- 25) 同上 p.577
- 26) 同上 p.193
- 27) 同上 p.367
- 28) 同上 p.404
- 29) 同上 p.387
- 30) 同上 p.374
- 31) 同上 p.57
- 32) 同上 p.402
- 33) 同上 p.541
- 34) 同上 p.382
- 35) 同上 p.563
- 36) 同上 p.350
- 37) 同上 p.369
- 38) 同上 p.387
- 39) 同上 p.377
- 40) 同上 p.193
- 41) 同上 p.364
- 42) 同上 p.377
- 43) 同上 p.410
- 44) 同上 p.379
- 45) 同上 p.511

- 46) 同上 p.401
- 47) 同上 p.364
- 48) 同上 p.584
- 49) 同上 p.584
- 50) 同上 p.580
- 51) 同上 p.345
- 52) 同上 p.509
- 53) 同上 p.378
- 54) 同上 p.526
- 55) 同上 p.508
- 56) 同上 p.370
- 57) 同上 p.349
- 58) 同上 p.576
- 59) 同上 p.579
- 60) 同上 p.412
- 61) 同上 p.405
- 62) 同上 p.508
- 63) 同上 p.581
- 64) 同上 p.57
- 65) 同上 p.413
- 66) 同上 p.338

#### 参考文献

- 『建築家ガウディ全語録』 鳥居徳敏 中央公論美術  
平成 19
- 『ガウディ建築入門』 赤地経夫・田澤耕 新潮社  
1998
- 『ガウディの宇宙』 細江英公 集英社 1984
- 『発禁 カタルーニャ現代史』 画セスク 文モンセラール・ローチ 現代企画室 1990
- 『カタルーニャ現代詩 15 人集』 澤田直訳編 思潮社  
1991
- 『スペイン市民戦争』 ヒュー・トマス 都築忠七訳  
みすず書房 1962
- 『スペイン戦争：ジャック白井と国際旅団』 川成洋  
朝日新聞 1989
- 『幻のオリンピック』 川成洋 筑摩書房 1992
- 『物語 カタルーニャの歴史』 田澤耕 2000
- 『カタロニア讃歌』 ジョージ・オーウェル 都築忠七  
訳 岩波書店 1992
- 『異次元への扉』 小笠英志 日本評論社 2009
- Antoni Gaudi, Aurora Cuito & Critina Montes,  
teNeues, 2003
- Gaudi, Juan-Eduardo Cirlot, TRIANGLE POSTALS,  
2002